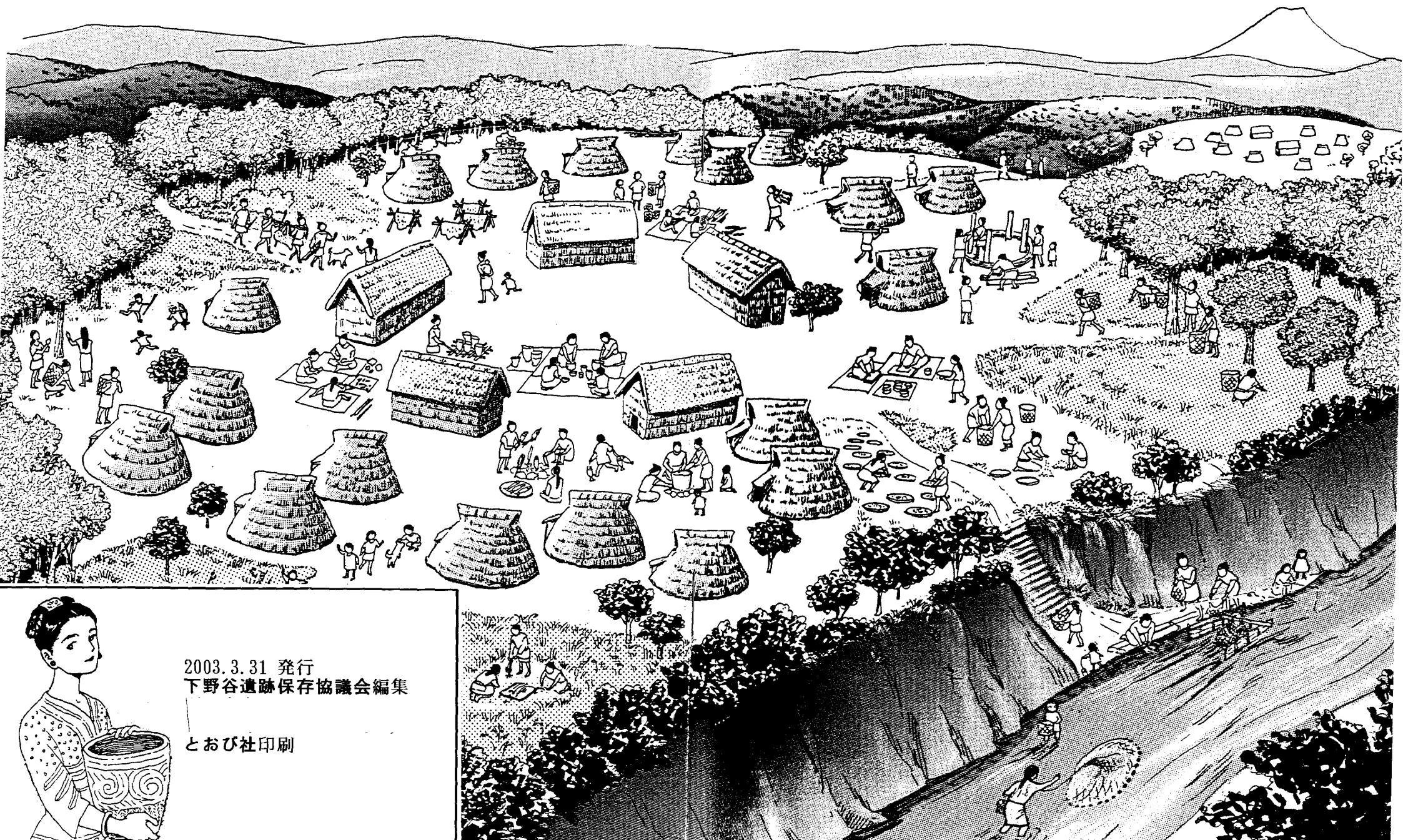


西東京市の
縄文大集落

したのやいせき
下野谷遺跡



2003. 3. 31 発行
下野谷遺跡保存協議会編集

とおび社印刷



<もくじ>

縄文時代の時期区分	1
1 縄文人のくらし	2
2 下野谷遺跡のあらまし	6
下野谷遺跡発掘小史	11
周辺の縄文遺跡	13
下野谷遺跡の保存と活用	14

<縄文時代の時期区分>

☆旧石器時代☆30,000年前～12,000年前

12,000年前～草創期～10,000年前
10,000年前～早期～6,000年前
6,000年前～前期～5,000年前
5,000年前～中期～4,000年前
4,000年前～後期～3,000年前
3,000年前～晩期～2,300年前

☆弥生時代☆2,300年前～1,700年前

▲表紙 縄文時代中期の西側環状集落イメージ図 (by 森生文乃^{モリオ アヤノ})

1 縄文人のくらし

◆縄文時代

今からおよそ1万2千年前ころ、氷河時代も終りに近づき、地球は急激に温暖化に向かいます。東日本には落葉広葉樹林帯が広がり、いろいろな木の実がなり、イノシシやシカの住む、豊かな森が出現しました。

年間を通じて食料となる動植物に恵まれ、生活が安定したため、集団での定住が進みます。煮炊きをする土器が発明され、食材の範囲がひろがり、味も格段に良くなりました。およそ1万年も続く縄文時代は、日本文明の原型が生まれた時代と言えます。

◆縄文人

豊かな日本列島をめざして、中国大陸南部や北方ユーラシア大陸から人々が渡ってきました。貝塚などから発掘された、200体以上の縄文人骨（成人男女）の測定によると、平均寿命は30歳位、平均身長は男性160cm、女性150cmくらいです。

現在の日本人は、長く日本の土地に住んでいた縄文人と、その後やってきた渡来系の弥生人の、両方の性質を受け継いでいるといえましょう。

◆住まい

縄文の家族は、直径4～5mぐらゐの円形や方形の^{たてあな}竪穴住居に住んでいました。地面を掘り下げて床とし、そこに柱を立て、^{けた}桁を渡し、全体を茅で^{かや}囲う構造が一般的です。床面の中央には、石囲いの炉や土器をすえた炉が作られました。竪穴住居は7～10年たつと、建て替えられていたようです。

◆食べ物

四季に恵まれた列島の縄文人は、季節に応じてドングリなどの植物を採取し、あらゆる鳥獣魚介類を捕らえます。冬場に備えて、食物の加工や貯蔵も行っていました。

当時、食用に供された代表的な動植物といえ、

- 堅果類^{けん か}＝クリ、ドングリ、トチ、クルミなど
- 根茎類^{こん けい}＝ヤマノイモ、ヤマユリなど
- 山菜類＝コゴミ、ワラビ、ゼンマイなど、○きのこ類
- 獣類＝イノシシ、シカ、ノウサギなど
- 鳥類＝ガン、カモなど
- 魚類＝タイ、サケ、フナ、ウグイ、コイ、ナマズなど
- 貝類＝ハイガイ、シジミ、アワビ、カキ、サルポーなど。

下野谷遺跡でも、食物に関係する遺構・遺物として、

- 捕獲用具＝落とし穴、矢じり
 - 魚具^{ど すい}＝土錘、石錘^{せき すい}（魚網のおもり）
 - 植物化石＝オニグルミ、ミズキ、エノキグサ
 - 炭化物＝クリの柱、リョクトウの種（栽培されたものか）
- が出土しています。

◆土器と土製品

下野谷遺跡から、多数の土器が発掘されています。煮炊き用の深鉢と、盛付け用の浅鉢が大部分でしたが、酒造りに使われたとされる有孔罎付土器も出土しました。時期が特定できる土器型式には、

- 早期＝稻荷台式^{しほぐち}、子母口式、野島式、鶺鴒ヶ島台式^{うがしまだい}、茅山下層式^{かやま}、茅山上層式
- 前期＝関山式、黒浜式、諸磯^{もろいそ}a式、諸磯b式、諸磯c式
- 中期＝五領ヶ台式^{あらみち}、阿玉台式^{かそり}、新道式、勝坂式、加曾利E式^{そり}、曾利式
- 後期＝称名寺式、堀之内式、加曾利B式。

土製品として、土錘、土器片製円盤^{しせん}、耳栓^ど（イヤリング）、土偶^ど、ミニチュア土器が出土しました。

◆石器と石製品

下野谷遺跡では、多種多様な石器が使われています。その主な

器種と石材には、

- 器種^{せきぞく}＝石鏃^{たつき}（矢じり）、スクレイパー（皮はぎ）、打製石斧^{せきふ}、
敲石^{えぐりいすりいし}、挟入磨石^{せきじん}、石刃^{せんとう}、尖頭器^{くまびがた}、楔型石器、磨石、石皿、
磨製石斧^{せきすい}、石錐^{いしすじ}（ドリル）、石匙、スタンプ形石器、石
棒^{ぼう}
- 石材＝黒曜石^{こくようせき}、硬砂岩、閃緑岩、安山岩、絹雲母片岩、チャー
ト^{けつがん}、頁岩、玄武岩、石英、粘板岩、流紋岩、玄武岩溶岩。

石製品として、垂飾（ペンダント）、砥石類、軽石製石製品、石錘^{せきとう}、石刀が出土しています。

◆交易と交流

鋭利な石器が得られる黒曜石^{こくようせき}は、火山製のガラスで、縄文人にとって極めて重要な原材です。下野谷遺跡出土の黒曜石を蛍光X線分析にかけて産地を特定したら、初めは神津島や箱根産だったものが、途中から和田峠（長野県）周辺のものが多くなってきたことが分かりました。

土器についても、その特徴的な文様から、関東内陸部はもとより、中部高地（長野県・山梨県）や南東北（福島県・宮城県）との交流のあったことが窺えます。日常の暮らしをささえるために、ほかの地域との物資の流通、人と人との交流、情報の伝達が、広範囲かつ恒常的に行われていました。

◆祭りと祈り

各地の環状列石（ストーンサークル）は、先祖をまつる墓域であるとともに、冬至に太陽の沈む地点を指し示しており、縄文人が「よみがえり」を強く意識していたといわれます。縄文中期に出現する環状集落では、集落の中心^{どこうぼ}に土坑墓をもつ広場があって、先祖の霊に見守られながら、日々の生活が営まれていました。

下野谷遺跡からは、祭祀やまじないに使われたと考えられる、石棒、土偶、石刀なども出土しています。

2 下野谷遺跡のあらまし

◆所在地

西東京市東伏見2丁目・3丁目・6丁目にまたがる、石神井川南岸の低位段丘面（立川面）から台地部一帯（武蔵野面）と北岸の一部を含む地域です。

なお、本遺跡の東に隣接する、練馬区関町北3丁目の富士見池遺跡群は、行政区が異なるため遺跡名は違いますが、下野谷遺跡と連続する遺跡と考えられています。

◆調査期間

<下野谷遺跡発掘調査小史>にあるとおり、本調査は1972年から2001年にかけて、10回行われました。

◆遺跡面積と調査面積

<下野谷遺跡全体図>に示したとおり、下野谷遺跡の推定面積は、東西約750m、南北約300mの約13万4000㎡です。うち調査面積は約1万3000㎡で、全体のほぼ1割を調査したことになります。

富士見池遺跡群を含めると、東西約1350m、南北約330m、総面積約28万5000㎡の広大な遺跡です。調査面積は約3万㎡にのびます。

◆遺跡の時代

旧石器時代、縄文時代早期・前期・中期・後期、近世以降。

◆主な遺構

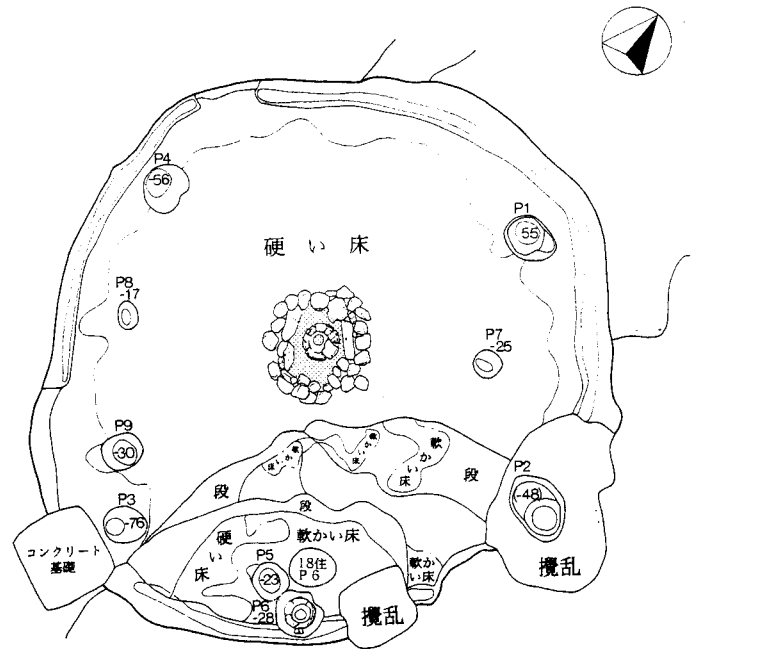
たてあな 堅穴住居跡、掘立柱建物跡、おと 炉穴、どこうほ 陥し穴、土坑墓を含む土坑（大型の穴）、ピット（柱穴など小穴）。

◆主な遺物

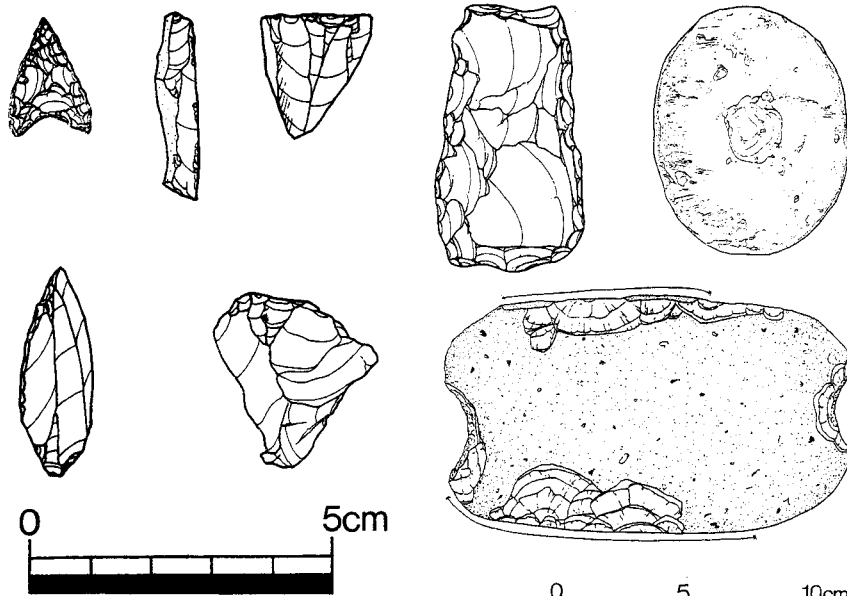
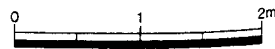
土器、石器、土製品、石製品、陶磁器（近世以降）。

◆縄文時代中期の大集落

今より温暖な気候であった、縄文時代中期（4～5千年前）は、



△石囲い炉をもつ堅穴住居



△出土した石器

東日本で人口が増え、各地に大きな集落が生れた、縄文時代で最も栄えた時期です。ここ下野谷遺跡も例外ではありません。

発掘された竪穴住居は300軒以上、掘立柱建物跡（倉庫？）は19軒です。まさに、石神井川流域はおろか、武蔵野台地で最大の集落であり、東京都では多摩ニュータウンのNo.72遺跡とならぶ、二大拠点集落であったと考えられます。もちろん、300軒以上の竪穴住居が同時にあったのではなくて、中期後半の5～600年のあいだに何度も建て替えられたわけですから、最盛期では十数軒の集落規模でしょう。

本遺跡の東側部分は、中央に広場があって、その東西に二つの土坑墓群をもち、広場のへりを掘立柱建物が、さらにその外側に竪穴住居が囲むという、典型的な環状集落であることが確認されました。集落の範囲は、東西240m以上、南北180m以上に及んでいます。

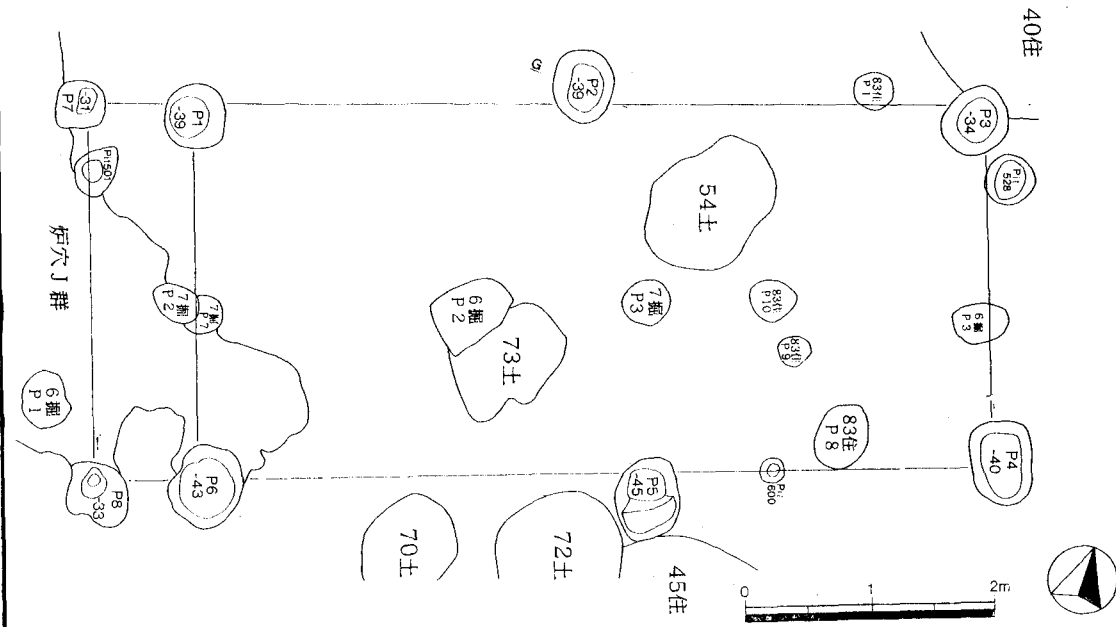
遺跡の西側部分は、あまり調査されていませんが、やはり環状集落のあったことが想定されています。さらに、東西二つの環状集落が同時に存在したかどうかは、西側環状集落の本格的な発掘を待たねばなりません。

◆縄文時代の特徴ある遺物

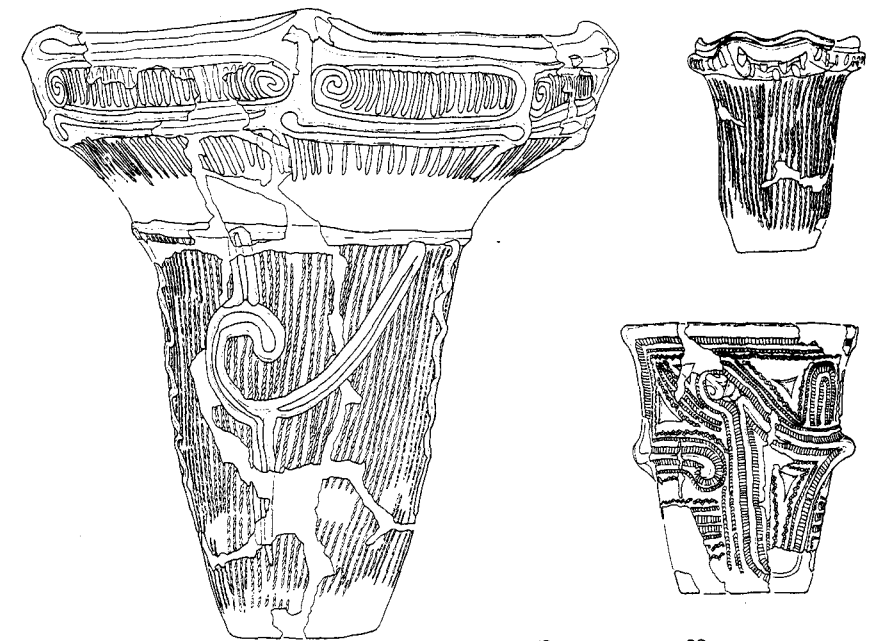
早期後半の抉入磨石が約100点出土しています。この堅果類をすりつぶすための石器は、多摩丘陵を中心に分布しますが、その中で出土点数が最も多い部類にはいります。

中期後半では、石刀が7点出土しています。

【図版出典】本書で使用した遺構・遺物の図版は、保谷市教育委員会・保谷市遺跡調査会 1999 『東京都保谷市下野谷遺跡－東鳩跡地におけるライオンズガーデン武蔵関公園菴番館・式番館建設に伴う第7次調査報告－』によります。



△掘立柱建物跡



△出土した土器

< 下野谷遺跡発掘小史 >

調査No	調査年	調査目的	旧石器・縄文時代の主な遺構	旧石器・縄文時代の主な遺物	特記事項
第1次	1972年	遺跡存在の確認	中期住居跡 1軒	縄文時代の土器 石器	早期～中期の集落に関する資料の取得
第2次	1973年	中期集落規模の確認	中期住居跡 8軒	早期～後期の土器	東端部から旧石器時代の遺物発見
第3次	1974年 1975年	旧石器時代文化内容の把握	旧石器礫群 中期住居跡 1軒	旧石器時代の石器、中期の土器 石器	旧石器時代の居住範囲が広範なことの確認
第4次	1976年	下水道建設に伴う事前調査	旧石器礫群 早期屋外炉 8基 中期住居跡 5軒	旧石器・縄文時代の石器	縄文時代の遺跡群が広範囲にひろがることが判明
第5次	1983年	遺跡の広がり の明確化	早期屋外炉 中期住居跡	早・前・中・後期の土器、石器	東側が溜淵遺跡に続く全遺跡範囲の確認
第6次	1989年 1990年 1991年	早稲田大学学生寮、テニスコートなど諸施設 の建設に伴う事前調査	旧石器礫群 早期炉穴 50基 陥し穴 2基 中期住居跡 150軒 土坑 600基 (土坑墓350基)	旧石器時代の石器 縄文時代各期の土器、石器、土製品、石製品	居住域と墓域の確認

第7次	1996年 1997年	ライオンズガーデン武蔵関公園 壺番館・式番館 建設に伴う事前調査	旧石器ブロック 礫群 各5ヶ所 中期住居跡 120軒 掘立柱建物 18棟 陥し穴 3基 土坑 87基	旧石器時代の石器 縄文時代各期の土器、石器、土製品、石製品	第6次と7次の調査により東側環状集落の具体的内容が把握された
第8次	1998年	集合住宅建設に伴う事前調査	中期住居跡 7軒 掘立柱建物 1棟 土坑 39基	縄文時代各期の土器、石器、土製品	墓城南端の明確化
第9次	1999年	石神井川整備工事に伴う事前調査	中期住居跡 3軒 土坑 1基 ピット 129本	縄文時代各期の土器、石器、土製品	江戸時代に川の流れを変えたことが判明 立川面での縄文時代住居跡の存在の確認
第10次	2001年	集合住宅建設に伴う事前調査	中期住居跡 5軒 土坑 6基 ピット 5本	縄文時代各期の土器、石器	

【旧石器用語】礫群＝拳大ほどの焼けた礫が集合したもので、屋外の調理施設と考えられている。
ブロック＝石器や剥片の集中地点で、石器製作の作業場あるいは居住の場所という解釈が一般的。

< 周辺の縄文遺跡 >

遺跡名	所在地	流域名	時期区分	主な遺構
田無南町遺跡	西東京市 南町5丁目	石神井 川	草、早	陥し穴
坂下遺跡 柳沢2丁目、東伏見5丁目	西東京市	石神井 川	早、前、中	土坑、ピット
下柳沢遺跡	西東京市 東伏見3丁目	石神井 川	早、中	住居跡、炉穴 土坑、ピット
富士見池西方 遺跡	練馬区 関町北3丁目	石神井 川	早、前、中	住居跡、ピット
富士見池遺跡 群*	練馬区 関町北3丁目	石神井 川	早、前、中 後	住居跡、炉穴 土坑、ピット
武蔵関北遺跡	練馬区 関町北4丁目	石神井 川	早、中	住居跡、陥し穴 土坑、ピット
川北遺跡	練馬区 関町北4丁目	石神井 川	早、中	住居跡、炉穴 陥し穴、土坑、ピット
葛原遺跡B地 点	練馬区 関町北4丁目	石神井 川	早、前	住居跡、炉穴 土坑、ピット
扇山遺跡	練馬区 石神井4丁目	石神井 川	早、中、後	住居跡、炉穴 陥し穴、土坑、ピット
北宮ノ協遺跡 (旧保谷No.1)	西東京市 北町5丁目	白子川	早、中	ピット、焼土跡
大泉井頭遺跡	練馬区 東大泉7丁目	白子川	中、後	住居跡、ピット
自由学園南遺 跡	東久留米市 学園町1丁目	立野川	草、早、前 中、後	住居跡、土坑

* = 溜淵遺跡、天祖神社東遺跡、葛原遺跡A地点を含む。

太字 = 縄文中期の拠点集落

< 下野谷遺跡の保存と活用 >

2000年10月、保谷市東伏見6丁目の国有地約3200㎡が競争入札されるとの情報が入り、急遽、保谷市や田無市の歴史研究団体など連名で、大蔵省関東財務局に入札の延期を申し入れました。この土地は、まさに下野谷遺跡の西側環状集落の中心部にあたり、遺跡内に残る約1万㎡の更地の一部です。保谷市も「新市になったら、買収の方向に持っていきたい」意向を表明して、国有地の入札はひとまず延期されました。

下野谷遺跡保存協議会は、地域の7歴史団体と考古学専門家3名により結成され、まず、下野谷遺跡の重要性と保存の必要性を、市長ほか市当局者や市議会議員に訴えることから始めました。

2002年2月には、市議会に対し3項目からなる「下野谷遺跡の保存・活用を求める陳情」=①本市東伏見六丁目4番の財務省所有地の早期取得②前項土地及び隣接する民有地に存在する遺跡の保存・活用③縄文博物館の建設を目的とする調査=を行い、これは6月の本会議で趣旨採択されました。

2003年1月に、講演会「市民と語る 縄文人の暮らし」を開催したところ、120人を超える参加者があり、下野谷遺跡に対する市民の関心の高さを示しました。さらに多くの方に、西東京市の誇るべき下野谷遺跡についてのご理解を深めていただくように、この小冊子を作成しました。

本会は、これからも地道な活動を息長く続けてゆく所存です。会の活動を支えていただく、一般会員および協賛会員を募集しておりますので、ふるってご入会ください。

2003年3月

下野谷遺跡保存協議会会長 近辻喜一